住む人・使う人が主人公!

私たちは住む人・使う人の 立場に立って設計しています。 お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

604-8083 京都市中京区三条柳馬場東入中之町10 代表取締役社長 川下 晃正 FAX http://www.kyoto-archi.co.jp/

〒601-8382 京都市南区吉祥院石原上川原町21 http://www.creates-k.co.jp

ノエイツかもがわ

TEL 075 (661) 5741 FAX 075 (693) 6605 送料何冊でも240円

ハンディのある子とない子と 大人たちの楽しい出会いの会

全多卷 幼稚園や小学校などに 400回超の出前紙芝居を原作に 揃本体4500円+税

いっしょにねり

共生の障害理解・地域づくりの種まき



絵本

ぶやき)実話から生まれ 姉妹の感動のおはなし。 なっちゃった」(幼稚園児のつ わたし、なんだか泣きたく わ

障がいのある子もない子も んないっしょに育った成長の 障害児も健常児も親も、 大人たちも輝くために!!

24

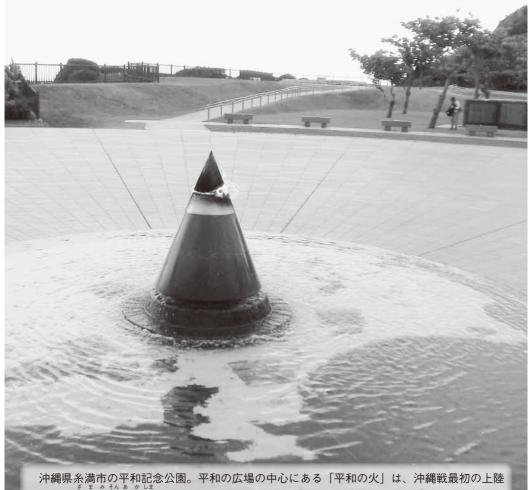
3いつしょにね!!

yoridono絵

各1500円+税 B5判変型32頁上 のおはなし。 向き合い じゃないんだね…。目に見え ゆうくんは、しつけの悪い 髙田美穂・いっしょにね にくい自閉症という障がいに 、ゆつくり歩む親 ij 文

1500円+税 B5判変型160頁並製 いっしょにね!! 編著田中智子・髙田美穂

沖縄から、平和の波永遠なれ



沖縄県糸満市の平和記念公園。平和の広場の中心にある「平和の火」は、沖縄戦最初の上陸地である座間味村阿嘉島で採取した火と、広島市の「平和の灯」、長崎市の「誓いの火」から分けられた火を合わせて灯されている。ここを中心として「平和の礎」(刻銘碑)が放射状に円弧のかたちで広がるように並び立つ。「平和の波永遠なれ」。世界に向けて平和の波が広がるように、と願っている。





辺野古の新基地建設は、工期も工費も明らかにされないままだ。大浦湾の軟弱地盤改良工事だけで5年の工期が見込まれ、沖縄県の試算では全工期は最短で13年以上になる。工費は防衛省が当初見積もった約2310億円の10倍、約2兆5000億円にのぼると県は試算する。

THE WATE





辺野古にはジュゴンをはじめ、絶滅危惧種262種を含む5800種の生物が確認されている。沖縄防衛局は新基地建設のためサンゴ約7万4000群体を移植するとしたが、一部を移植しただけで護岸工事や埋め立てに着手した。基地ゲート前に張りめぐらされたフェンスの前に抗議の座り込みをする人々を機動隊員が強制排除して、大型工事車両が進入する。

2019年2月24日、新基地建設埋め立ての賛否を問う県民投票が実施され、全有効投票の72.15%を反対票で占め圧勝。「オール沖縄」の意思がはっきりと示された。正義と道理にかなう不屈のたたかいが続く。 (写真・文 塩見一弥)

ラッキ―植松 74

2020年1月号

●特集● 地域からみた2020年――地域づくりはつながりの積み重ね

商品の購買活動をつうじてできること 松岡 賢司 12 あらためて感じる食と居場所づくりの大切さ 梶 直実 16 あらためて、福祉事業の根幹を問いなおす 山本 政幸 19 【討論】あたらしい可能性をめざして 22

●トピックス●

【PHOTO】つながって! ひろがって! 福祉まつり 30 【鼎談】わたしたち、提訴します! 藤原るか・伊藤みどり・日下部雅喜 34 雨しか落ちてこない平和な空を子どもたちに 神谷 武宏 40 "福祉は権利!"今こそみんなで声をあげよう **——10.27愛知県民集会** 西田 知也 46

第24回合宿研究会in京都 開催のご案内 48 調査からみる社会福祉現場の人材確保の課題 高倉 弘士 50 年始広告 54

●連載●

阿修羅がゆく

わたしが好きな釜ヶ崎(6) 水野阿修羅 62 相談室の窓から 「合理的配慮」があたりまえになるために **青木 道忠 64**

育つ風景 第二の断乳? 清水 玲子 66 ひととしてあたりまえに生きたい

大阪ろうあ会館の事業のむずかしさ 清田 廣 68

映画案内

『男はつらいよ お帰り 寅さん』 吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて

カミに気を使うのじゃ~!

生活保護の現物支給案を考える **牛田** 武志 72

似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

ホームレスから日本をみれば ありむら潜 76

花咲け! 男やもめ 川口モトコ 77

みんなのポスト 60 / 福祉の動き 78 / 今月の本棚 81

●グラビア● 沖縄から、平和の波永遠なれ

表紙の絵● 神門やす子



障害者と労働



社会福祉法人いずみ野福祉会 理事長 板原克介さん

りつけるとすれば、三療師(あん摩マッサージ指圧師・はり師・きゅう師)となるか、 時の大阪府立盲学校に入学しました。そして、物心がつく頃から、重度視覚障害者が仕事にあ 教員になるしかないと聞かされていました。 なさんに、 大阪に生まれました。 明けましておめでとうございます。 私は、身体障害者福祉法案作成作業がおこなわれていた一九四八年、重度視覚障害児として 馴染みの方も少ないと思います。 少し私の期待を申し上げ、 私は就学免除という権利侵害は受けなかったものの、 『福祉のひろば』発刊四〇周年を言祝ぎたいと思います。 そこで、私の自己紹介を兼ねて社会福祉事業に携わるみ 思えば、 私はこの誌上に二〇年以上顔を出してい 選ぶすべもなく当 それらの

みで、 の間、 名古屋市昭和区にあった、自由で楽しそうな雰囲気をかもし出していた日本福祉大学に入学し のはあまりにも人々に対して失礼だと感じました。そこで、私は気を確かにもとうと、その頃 あるはずだと気づきはじめましたが、特段高い志をもっていたわけでもなく、 しかし、そのような意気込みは楽しい学生生活のなかで薄れ、 ○歳を超えた頃でしょうか、少し世の中がわかってきた私は、自分にも職業選択の自由 三療の奥深さを知り、およそ自分にはその才能がないことに気づき、このまま職に就く 結局高等部まで進み、三療師の教育課程を経て資格を取得してしまいました。しかしそ 結果よく勉強もせず、 感覚的に抗うの 卒業を

下敷きとしてあったのですが、大学三年次の終わり、ゼミの学友に引きずられるように連れ 11 い活動である」との自縛を解くことができたことでした。それは、それまでの学問的な影響も は人間の自由につながる」という考え方を学び、それまでの「働くことは義務であり仕 迎えることになるのですが、その頃の唯一とも言える成果は、 かれた「共同作業所」との出会いが、 きっかけとなったのです。 「労働は権利であり、 方がな



いたはら かつすけ

み野福祉会のHP (http://s-izumino.jp/)

ぐれたハビリテーション・リハビリテーションとなる。四つは、その頃、 斐を感ずるとともに、発達する意欲が高まる。また、先のような原則を踏まえた〝労働と集団 きなよろこびとなる。二つは、互いに尊重し合える〝集団〞 あるいはほかの障害と重複している、 を中核とした福祉実践を、成人期に達した重い障害のある人々に保障できるならば、それはす るよろこびはない。三つは、そのような〝労働と集団〟に恵まれれば、自ずから大きな生き甲 私は学位請求論文を作成するなかで、次のような四点にわたる結論を得ました。 九七七年、 わが国の多くの障害者福祉事業や法制度には大きな問題があるということでした。 つは、人はその個性に合い、人間的な目的をもった〝労働〟に恵まれるならば、それは大 私はこの結論をもって大阪に帰り、「社会福祉法人いずみ野福祉会」の前身で あるいは障害が重いことでそのような人々を拒否してい の一員となれるならば、 障害種別が異なる、 それに

学ぶ決意を新たにさせ、大学院へ進ませることになったのです。

たちをも、その輝きの渦に巻き込む、躍動的な集団があったのです。この経験が私を改心させ、

共同作業所では対等な仲間として打ち解け合って働いていました。そこには、

訪問者である私

ぽう障害者を園生・通所生と呼ぶなど、およそ平等な関係を感じさせなかった職員と障害者が、

その頃、多くの成人施設では、たとえば職員のことは権威付けとして「先生」と呼ばせ、

す。 その内容を投稿するなどし、社会的にその先駆性・科学性の有無を問うことが大切だと思いま ることが大切であり、 やはり法制度や風潮にただ迎合するのではなく、 ある「岸和田障害者共同作業所」の創設に加わったのです。そして今に至っているわけですが、 総合社会福祉研究所と『福祉のひろば』のますますの発展に期待します。 それに対応する社会福祉実践においては、 われわれは国民の切実な実態と要求を読み取 たとえば 『福祉 のひろば』に

地域からみた二〇二〇年 -地域づくりはつながりの積み重ね

も食堂がこれからの「地域」のあり方を考えていくうえで、大きなカギになるということだと思います。 薄化していると言われて久しいですが、そうしたなかでこれだけ急速に子ども食堂が広がっていることは、 六月時点では三七○○か所と、三年間で一○倍以上に増えています。近所付き合いがない、 いま、 日本全国で「子ども食堂」が急速に増えています。二〇一六年には三一六か所だったのが、二〇一九年 地域 の人間関係

は、 して、たったそれだけで救われることがあるのだと実感します。 かに食べさせてもらえるだけでもお母さんの夕食時の負担がどれだけ減るか、おなじ三歳と一歳の子をもつ親と れました。その日のメニューはカレーだったのですが、三歳のお姉ちゃんは自分で上手に食べ、一歳の男の子に る、子ども食堂「ひまわり」にお邪魔しました。一八時半ごろ、三歳と一歳のお子さんとお母さんの親子が来ら 大阪福祉事業財団の施設を活用し、おおさかパルコープが食材を提供し、ヘルスコープおおさかが運営してい ボランティアの方がお母さんに話しかけながらカレーを食べさせてあげていました。下の子のごはんをだれ

きることは子ども食堂の重要なポイントですが、いっぽうで、本当に困難を抱えている子どもや親に来てもらえ 子ども食堂には、 貧困家庭以外の子どもたちも自由に参加できます。 引け目を感じることなくだれでも参加で

ているかわからない、ということが課題としてあげられています。ひまわりのボランティアの方もその

点については課題を感じておられましたが、ひまわりは地域の小学校とも連携し、 先生たちや校長先生

とも情報交換をしながら運営しているとのことでした。

また、「おじいちゃん、おばあちゃんとお孫さん」で来られている方もいました。仕事で遅くなる親し

方たちをみても、子ども食堂は地域交流の拠点になり得るのではないかと感じました。

に代わって、「じぃじ・ばぁば」が孫をあずかっているのだと思います。

地域との連携や参加している

地域の人間関係が希薄になるなかで、自治会や子ども会、PTAなどの活動が困難になっていると言

われています。 いっぽうで、インターネットやSNSがこれだけ普及していることを見ると、子育て世

代の方たちが単純に人とつながること自体を避けているわけではなさそうです。むしろ、遠くに住む友

だちやなかまといつでも連絡が取りあえるからこそ、「地域」でつながることの意義が感じにくいのか

もしれません。なんでも相談できる気の合う友だちも大切ですが、^いま、 子どもに夕食を食べさせる

堂のひろがりは、それを必要としている人たちがたくさんいることをあらわしてい のを手伝ってもらえたり、、今日、会って話ができる「近く」の関係も、 かならず必要です。子ども食

るのではないでしょうか

り方があり、それを求めている人はたくさんいるのだと思います。 少子高齢化がすすみ、共働き世帯が増えているいまの時代に合った「地域」のあ (編集主任)

> 福祉のひろば 2020-01